章安灌頂の教学に関する研究

村上明也

課程博士の学位請求論文の要旨を述べる前に、目次を挙げておく。

序論
第一章　研究の目的と先行研究の課題
第一節　研究の目的
第二節　先行研究の概観とその課題
第一項　天台智顗に関する先行研究
第二項　章安灌頂に関する先行研究
第二章　研究の方法
第一節　灌頂教学を究明する二類の方法
第二節　方法論の妥当性
第三節　本論の構成

本論
第一章　灌頂の基礎的研究
第一節　灌頂伝研究の資料
第一項　灌頂伝の種類とその内容
第二項　灌頂の生涯と時代区分
第二節　灌頂伝をめぐる一、二の問題
第一項　智顗・灌頂・吉蔵の交流
第二項　灌頂の長安出向
第三節　灌頂の著作について
第一項　諸種の目録に見る灌頂の著作
第二項　灌頂の撰述書と智顗説灌頂記の文献
小結
第二章　天台三大部編集に見る灌頂教学の特徴
第一節　灌頂における『法華玄義』「行妙」段の形成
第一項　『法華玄義』「位妙」と『四教義』との本文的関連
第二項　『法華玄義』「行妙」と『四教義』との本文的関連
第三項　『法華玄義』の円教「五行」解釈は智顗真説か
第二節　灌頂における『摩訶止観』「六即大乗」説の再治
第一項　『三観義』及び『維摩経玄疏』の「六即大乗」説
第二項　『法華玄義』の「六即大乗」説
第三項　『摩訶止観』の「六即大乗」説
第三節　智顗講説当初の『摩訶止観』と
灌頂編集後の『摩訶止観』における修道論の相違
第一項　現行『摩訶止観』における修道論
第二項　「二十五方便」と「四種三昧」の関係
第三項　「十乗観法」と「四種三昧」の関係
第四節　智顗と灌頂とに見る『中論』「三諦偈」解釈の相違

第一項　智顗真撰書に見る『中論』「三諦偈」解釈
第二項　灌頂撰述書に見る『中論』「三諦偈」解釈
第三項　智顗親撰書に見る『中論』「三諦偈」解釈
小結
第三章　灌頂自撰書に見る教学的特徴
　―嘉祥大師吉蔵との比較を通して―
第一節　智顗と吉蔵における法雲の法華法身観への反駁
第一項　法雲説『法華義記』の「十方相望」説について
第二項　法雲の「十方相望」説に対する智顗の反論
第三項　法雲の「十方相望」説に対する吉蔵の反論
第二節　智顗・灌頂と吉蔵の『涅槃経』観の相違
第一項　『涅槃経』に「久遠実成」義ありとする『法華玄義』と『法華文句』
第二項　灌頂における『涅槃経』の「久遠実成」義解釈
第三項　天台教学と三論教学における『涅槃経』観の相違
第三節　灌頂『涅槃経疏』所引の『涅槃論』について
第一項　智顗と『涅槃論』
第二項　灌頂『涅槃経疏』所引の『涅槃論』「婆藪七分」説
第三項　灌頂『涅槃経疏』所引の『涅槃論』「秘密」釈
第四項　灌頂『涅槃経疏』が引く『涅槃論』は吉蔵著作中からの孫引きか
小結
第四章　灌頂が与えた後世への影響
　―未解決文献『菩薩戒義疏』を中心に―
第一節　『菩薩戒義疏』の「天台大師説」を疑う
第一項　智顗と菩薩戒
第二項　『菩薩戒義疏』の智顗親撰及び真撰に関する検討
第三項　『菩薩戒義疏』の成立年代の推定
第二節　灌頂撰『菩薩戒義疏』の可能性
第一項　智顗の「戒体」説
第二項　灌頂の「戒体」説
第三項　『菩薩戒義疏』の「戒体」説
第三節　『菩薩戒義疏』の成立事情
第一項　『菩薩戒義疏』は『梵網経』の注釈書か
第二項　『菩薩戒義疏』が『梵網経』の形式面に注目した理由
第三項　『菩薩戒義疏』が『梵網経』の内容面に注目した理由
第四項　『菩薩戒義疏』の成立に与えた灌頂の影響
小結
結論

本研究の目的

本研究は、隋末初唐に活躍した章安灌頂（五六一―六三二）の教学を取り上げ、彼を中国仏教史および中国天台史の上に位置づけることを目的とする。

周知の通り、灌頂は、至徳三（五八五）年から開皇十七（五九七）年までの十三年間、天台教学の大成者として著名な天台大師智顗（五三八―五九七）の門に身を投じ、智顗講説の天台三大部（『法華玄義』『法華文句』『摩訶止観』）などを筆録聴記した人物である。また、灌頂は、その生涯において、三論教学の大成者として名高い嘉祥大師吉蔵（五四九―六二三）とも交流を持っているので、彼の周囲に

は、旧来の南北朝仏教を改革して隋唐新仏教の黎明期を築いた智顗・吉蔵の二人がいたことになる。

そこで、灌頂については、従来より智顗教学との比較をめぐる問題と、吉蔵との文献交渉をめぐる問題の二つをもって個別的に評価されてきたように思われる。

そもそも、中国天台史において、灌頂は智顗の祖述者としてのみ扱われ、いまだ彼自身に師の教学を越え出るような学説上の発揮はないと考えられてきた。① しかし、現行の天台三大部は、いずれも智顗が自ら筆を執って著した親撰の書ではなく、智顗滅後に灌頂が書冊になしたものである。しかも、天台三大部には、灌頂の私見が相当加わっていることから、智顗と灌頂の教学は、天台三大部の本文批判を通して厳密に区別されなければならない。② にもかかわらず、両者の教学を峻別する作業は、天台三大部の内容が複雑かつ難解で、慎重を期すべき繊細な問題であるためか、遅遅として進んでいないというのが実状である。

一方、『法華玄義』『法華文句』には、吉蔵『法華玄論』『法華義疏』が、また灌頂『涅槃経玄義』には、吉蔵『涅槃経遊意』が随所に抜抄されており、年代的に嘉祥疏を参照できなかった智顗に対して、灌頂は天台法華疏の編集過程や自著の執筆において吉蔵を意識していたことが指摘されている。③ ところが、従来の研究では、灌頂と吉蔵の著作間における本文的な文献交渉にのみ重点が置かれ、両者の教学の相違をめぐる教義交渉の問題については、必ずしも明確に論じられていない。

このような状況であるから、これまでの論考は、あくまでも智顗と灌頂、あるいは灌頂と吉蔵という人物間の比較を中心に論が重ねられてきたといえる。しかしながら、智顗と吉蔵の二人は、一方で南北朝時代の仏教を批判し超克して、隋唐新仏教を切り開いた人物でもある。灌頂に智顗や吉蔵とも異なる教学の発揮が認められるならば、今一度、灌頂を南北朝から隋末初唐の仏教史の上に位置付ける必要があるのではないか。

したがって、本研究は、こうした視点に立って灌頂の教学を解明することを企図したものである。

第一章　灌頂の基礎的研究

第一章では、灌頂の教学を明らかにするための予備的な作業として、彼の伝記や著作に関する整理を行った。

現在、灌頂伝を知るための文献として重要視されるのは、『続高僧伝』『涅槃経玄義』『国清百録』『隋天台智者大師別伝』であり、これらの資料に基づいて灌頂伝を纏めたのが第一節である。

第二節では、上記の灌頂伝に基づいて「智顗・灌頂・吉蔵の交流」（第一項）及び「灌頂の長安出向」（第二項）の二点を考察し、従来から問題となっている平井俊榮博士の見解④に対して再検討すべきことを指摘した。

第三節では、灌頂の撰述書を伝える目録類を整理し、彼の書物が

現存するだけでも六部四十九巻に上ることを明らかにしている。

もっとも、本章は、灌頂の生涯や著作に関して基礎的な整理を行ったものであるため、本論文の結論に直結するような成果が多いわけではない。しかし、灌頂編集の天台三大部や自撰書の中で吉蔵疏を意識することになった縁由が、伝記資料に胚胎していたという事実は、本章の検討なくしては得られない成果であった。

第二章　天台三大部編集に見る灌頂教学の特徴

第二章は、智顗が親しく筆を執って著した親撰書、智顗の講説を門人灌頂が聴記して完成させた真撰書、灌頂自撰書の三類書を全般的に検証し、智顗真撰の天台三大部における灌頂編集箇所を見極め、智顗と灌頂の思想を弁別しようと試みたものである。

第一節では、『法華玄義』「行妙」段の本文について批判的な検討を加えている。古来より、親撰『四教義』や吉蔵『法華玄論』が『法華玄義』に与えた影響については、先学による指摘が多数なされているが、『法華玄義』の「行妙」段に関しては、これを智顗独自の学説として誰も疑いを差し挟むことはなかったのである。[5] ところが、『法華玄義』「行妙」段における別教「五行」解釈の本文は、智顗最晩年の親撰『四教義』を参照していることが判明してきた。さらに、『四教義』には、『法華玄義』の円教「五行」解釈が説かれないことから、こうした編集をなし得た人物こそ、門人灌頂ではないかとの疑義を示したのである。

第二節では、現行『摩訶止観』における「六即大乗」説に灌頂の再治があることを指摘した。「六即大乗」説とは、『大品般若経』と『法華経』を用いて、円教行位の「六即」を「大乗」として立証することである。そして、この学説は、現行『摩訶止観』以外の親撰『三観義』などにも論じられている。しかし、現行『摩訶止観』の「六即大乗」説だけは、『大品般若経』の経典名を伏せ、六即すべてに『法華経』の経文を差し挟んでいることが分かってきたので、これこそは智顗入寂後に『摩訶止観』を完成させた灌頂の再治部分であろうとの疑いを示した。

第三節は、灌頂『観心論疏』に引かれる智顗講説当初の『摩訶止観』と灌頂編集後の『摩訶止観』の本文を対照することで、灌頂による『摩訶止観』の具体的編集箇所の解明を試みたものである。現行『摩訶止観』は、「十乗観法」を説く中において、必ず「四種三昧」という語を示すのに対し、『観心論疏』所引の『摩訶止観』は、「十乗観法」中に一度も「四種三昧」なる語を使用しないことなどから、現行『摩訶止観』の「十乗観法」中にそうした要語を書き添えた人物に、門人灌頂を推定した。

第四節では、智顗親撰、真撰、灌頂撰述書を網羅的に吟味し、灌頂における学説上の発揮について検討を加えている。従来、天台教学においては、親撰『四教義』に基づいて、化法四教の教証を『涅槃経』「四不可説」「四種四諦」、『法華経』「三草二木」、『中論』「三諦偈」であるとし、この智顗独創の学説に対して何の疑いももたれ

てこなかった。[6] しかしながら、智顗親撰書は、『中論』「三諦偈」を「因縁所生法　我説即是空」「亦為是仮名」「亦是中道義」の三句に分類するのに対し、これを「因縁所生法」「我説即是空」「亦為是仮名」「亦是中道義」の四句に分類しているのは、智顗真撰書及び灌頂自撰書にのみ見られる学説だったのである。したがって、『中論』「三諦偈」の初句を単独で使用して、そこに蔵教などを数法的配釈するのは、灌頂発揮の学説と考えるべき疑いを提示した。

無論、灌頂における天台三大部編集の具体的な作業過程は、簡素を複雑にする部分もあれば、複雑を簡素にする部分もあったかと思うが、結果として灌頂が上記のような修治・添削・加上などを行ったことは、師説に基づきながらも、『法華経』と『涅槃経』に関する教説を中心に編集を手がけた独自の成果と見なすことができる。

第三章　灌頂自撰書に見る教学的特徴
―嘉祥大師吉蔵との比較を通して―

第三章は、智顗・灌頂と吉蔵における教学を比較しながら、灌頂独自の教学的特徴について論及したものである。

隋代仏教を代表する天台や三論の両学派は、『法華経』に「仏身常住」や「仏性」の教説ありと唱えて梁の光宅寺法雲（四六七―五二九）の『法華経』解釈へ激しい批判を行っている。そこで、第一節では、「仏身常住」の問題に焦点を絞り、智顗と吉蔵における法雲批判の具体相を明らかにした。法雲には、「神通延寿」と「十方相望」と呼ばれる二種の仏身説があり、従来の研究では、「神通延寿」説のみを中心に智顗や吉蔵における法雲批判が論じられてきたが、[7] 一方の「十方相望」説については、法雲提唱以後、もはや誰からも批判や言及を受けない学説であると考える研究者もいる。[8] ところが、智顗も吉蔵も「十方相望」説に対して明確な批判を行っていることが判明してきたので、彼らが法雲の「神通延寿」説だけに論難を加えたとする見解を改めるべきことを指摘したのである。

第二節では、前節での検討を踏まえ、天台と三論における教学の相違を明らかにし、併せて灌頂独自の教学的特徴について論じている。そもそも、『法華玄義』『法華文句』は、法雲への反駁を通して『涅槃経』にも『法華経』と同じように「久遠実成」の義ありと唱えて、両経を同一価値の経典として位置づけるが、天台法華疏の当該箇所には、吉蔵『法華玄論』とよく似た議論が存在するため、従来から両学派に教義交渉があるのではないかと指摘されてきた。[9] しかし、智顗・灌頂の天台は、『涅槃経』にも『法華経』の「久遠実成」義が明かされるとし、他方、三論の吉蔵は、釈迦一代の説法が「涅槃」義を明かす点において異なりなしと述べて、すべての大乗経典を平等視していたのである。よって、両学派の教学の相違が経典観の上に如実に表れていることが判明した。残る問題として、天台と三論による論旨の一致があるが、たとえ天台法華疏における『涅槃経』の「久遠実成」義をめぐる議論が智顗真説ではなく、灌頂による吉蔵撰述書参照のあとであったとしても、年代的に吉蔵疏

を聞し得た灌頂が、吉蔵との教学の相違を明確に打ち出し、『涅槃経』の経文に法雲・慧遠（五二三―五九二）とも異なる「久遠実成」義を読み込んでいたことは、智顗の教説にも見られない灌頂独自の教学的発揮点として認めてよいと考える。

第三節では、慧遠、智顗、吉蔵、灌頂における『涅槃論』の引用を調査し、併せて灌頂と吉蔵の文献交渉の問題について検討を加えている。中国仏教史上、天親造 達摩菩提訳の『涅槃論』を初めて引用したのは、従来、吉蔵や灌頂であると考えられてきたが[10]、慧遠説『涅槃経義記』には、現行の『涅槃論』と一致する科段名が出されているので、『涅槃論』の初引者は、吉蔵や灌頂ではない。また、灌頂『涅槃経疏』が引くところの『涅槃論』の本文は、すべて吉蔵『涅槃経遊意』と本文的に一致するため、灌頂が吉蔵の著作を参照したとする、所謂「天台と三論の文献交渉」の問題が浮上してきたのである。ただし、灌頂は一箇所だけではあるけれども、吉蔵が使用することのない『涅槃論』の文を引いているので、灌頂所引の文は吉蔵著作中から孫引きされたものでないことを指摘した。

以上、灌頂の独自の教学は、智顗が提唱した「法華涅槃同時同味」を常に念頭に置き、法雲・慧遠・吉蔵を批判的に扱う中で示されていったものと考えられる。

第四章　灌頂が与えた後世への影響
―未解決文献『菩薩戒義疏』を中心に―

第四章は、これまで智顗真撰書と考えられてきた『菩薩戒義疏』の撰者や成立年を再検討することで、灌頂が後世に与えた影響について私見を述べたものである。

第一節では、「隋天台智者大師説　門人灌頂記」の撰号を持つ『菩薩戒義疏』の「智者大師説」に対して疑義を呈している。すなわち、本疏には、智顗入滅後に現行形態が整う天台三大部などの本文が抜抄されているので、『菩薩戒義疏』は、天台大師によって直接著された［親撰］でも、智顗の講説を門人が筆録整理した［真撰］でもないことを指摘した。

第二節では、残された撰号「灌頂記」について、智顗や灌頂の諸文献と『菩薩戒義疏』にみられる戒体説を検討するとともに、本疏の成立年代に言及している。そもそも、智顗と灌頂の著作間に見られる戒体説は、「心法戒体説」（『次第禅門』『観心論疏』）「色心戒体説」（『円頓止観』『摩訶止観』[11]）「色・心や作・無作に執着しない」（『涅槃経疏』）などとあって一貫していない。ところが、『菩薩戒義疏』の戒体説には、「性なる無作の仮色」が宣揚されていることから、本疏の撰者に灌頂を推定できない旨を強調したのである。よって、厳密な文献学に基づく限り、『菩薩戒義疏』の成立年代は、『大唐内典録』以降の［六六四］が上限、本疏の本文をはじめて引用す

る元暁の没年［六八六］が下限となるので、『菩薩戒義疏』は、七世紀半ばに撰述された智顗［仮託］の文献とするのが、現存の資料をもってする現在の研究段階であることを論じた。

第三節では、『菩薩戒義疏』が何故に『梵網経』を注釈せねばならなかったのかについて言及し、本疏成立の事情を解明することに努めた。従来、『菩薩戒義疏』は、『梵網経』独自の経文を積極的根拠にして、その注釈理由が語られてきたが[12]、同様の趣旨は、智顗がよく引用する『瓔珞経』の中にも示されている。よって、本疏が『梵網経』を取り挙げた理由は、また別の点に求められるべきである。そこで、この二経に対する『菩薩戒義疏』の注釈を追ってみると、『梵網経』と『瓔珞経』の相違は、「無作あり」の戒体を標榜する立場から明確な説明が果たされているため、本疏は、『梵網経』に依拠しなければ論を展開することができない文献であることを述べた。

以上を踏まえ、『菩薩戒義疏』成立の事情を考えてみると、本疏は、智顗・灌頂没後、天台五時判の第一華厳時に相当する注釈書が皆無であることに端を発して、『華厳経』の結経たる『梵網経』の注疏作成に思いを寄せた一天台学徒が、『梵網経』の経文と真摯に向き合い、灌頂編集の天台三大部などを参照して完成させた文献であると考えられる。したがって、『菩薩戒義疏』成立の事情と灌頂の功績とが密接に結びつくこと、また本疏が後世の仮託偽撰書として全く無価値なものでないことの二点を第四項で明らかにした。

結論

本研究から得られた結論として特に主張しておきたいことは、灌頂の教学は、梁代の碩学であった光宅寺法雲や、共に同じ時代を生きた嘉祥大師吉蔵などとの対決・超克を意図することで、より組織的で独自な特色を示し、『法華経』と『涅槃経』の関係性に注目しながら、師智顗にも見られない学説を、天台三大部の編集や「涅槃経疏」を撰述するなかで構築していったということである。灌頂が智顗の教学をそのままのかたちで伝えなかった所以はここにあると考える。

従来の研究では、智顗や吉蔵との個別的な比較を通して灌頂教学が評価されてきたが、天台三大部の編集においても、吉蔵撰述書との比較においても、灌頂が独自の教学を有していたことは明らかであり、しかもそうした議論の根底には、法雲の「『法華経』は『涅槃経』よりも一段低い経典である」という問題が常に横たわっている。よって、灌頂は法雲、慧遠、智顗、吉蔵という中国法華教学史と涅槃教学史の両教学史の上に位置付けられる人物といえる。

また、本研究では、灌頂が与えた後世への影響についても考察の視野を広げ、従来から灌頂の功績に数えられてきた天台三大部の編集や『隋天台智者大師別伝』などの史資料の編纂が、七世紀半ばに成立する『菩薩戒義疏』と大いに関わっていたということも明らかにしている。これは、灌頂に独自の教学が存するという一面以外に

も、灌頂滅後、六祖湛然（七一一―七八二）が世に出るまでの空白の約八十年間、所謂「第一期天台暗黒時代」⑬における天台教団の動向を知る上で極めて重要な指摘となるだけでなく、このことが中国天台史上における灌頂の立場を一層独立した地位に押し上げるものとなった。

したがって、灌頂は、次代の天台教団の足どりを辿る上で貴重な『隋天台智者大師別伝』や『国清百録』などを編纂して天台山上の教団運営を助勢する一方、自らの信念と師への報恩を胸に懐きながら、様々な人師や文献との交流・交渉を通して天台三大部の編集並びに『涅槃経』研究に没頭した孤高の学究者としての側面をもつ学僧であり、従来から智顗の祖述者として扱われてきた灌頂による独自の教学発揮が、法雲、慧遠、智顗、吉蔵などをめぐる多様な問題を取り扱う中で形成されていったことを明らかにした。

註

① 島地大等『天台教学史』（明治書院、昭和四年）の一一五頁

② 佐藤哲英『天台大師の研究』（百華苑、昭和三十六年）を参照

③ 佐藤哲英『前掲書』、平井俊榮『法華文句の成立に関する研究』（春秋社、昭和六十年）、河村孝照「章安の涅槃経観―とくに涅槃経玄義において―」（『東洋学研究』一九、昭和六十年）、同「灌頂撰『涅槃経玄義』における「有る人」とは誰を指すか」（『印度学仏教学研究』三四の一、昭和六十年）などを参照

④ 平井俊榮「吉蔵と智顗―経典註疏をめぐる諸問題―」（『東洋学術研究』二〇の一、昭和五十六年）および平井俊榮『前掲書』を参照

⑤ 福島光哉「天台智顗の涅槃経五行の解釈」（『仏教学セミナー』第三三号、昭和五十六年）や木本清史「『法華玄義』における涅槃経の五行」（『天台学報』第二五号、昭和五十八年）を参照

⑥ この学説を智顗独創として理解するものに、佐々木憲徳『天台教学』（百華苑、昭和二十六年）の一〇九～一一〇頁、福田堯頴『天台学概論』（三省堂、昭和二十九年）の一三七頁、安藤俊雄『天台学根本思想とその展開』の九三頁などがある。

⑦ 横超慧日『法華思想の研究』「法華教学における仏身無常説」（平楽寺書店、昭和六十一年（筆者所見は第三版））や田村芳朗「法雲の『法華義記』の研究」（坂本幸男編『法華経の中国的展開』所収、平楽寺書店、昭和四十七年）を参照

⑧ 木村宣彰「法雲の仏身説」（『仏教学セミナー』第一六号、昭和四十七年、のち木村宣彰『中国仏教思想研究』、法藏館、平成二十一年に収録）

⑨ 奥野光賢『仏性思想の展開―吉蔵を中心とした『法華論』受容史―』（大蔵出版、平成十四年）の二三五頁の脚注（二二）を参照

⑩『仏書解説大辞典』第八巻・四一二頁や『新国訳大蔵経』「釈経論部十八」（大竹晋、『涅槃論』解題、大蔵出版、平成二十三年）を参照

⑪ 平川彰「智顗の戒体論について」（奥田慈應先生喜寿記念『仏教思想論集』所収、平楽寺書店、昭和五十一年）を参照

⑫『国訳一切経』「律疏部二」の藤本智董「菩薩戒経義疏解題」を参照

⑬ 島地大等『前掲書』を参照